

新学習指導要領のポイント

1 改訂の経緯及び基本的な考え方

変化が激しく予測困難な時代を踏まえ、子どもたちが変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、情報を見極めて再構成し、新たな価値につなげていくことができるようにすることなどが求められます。

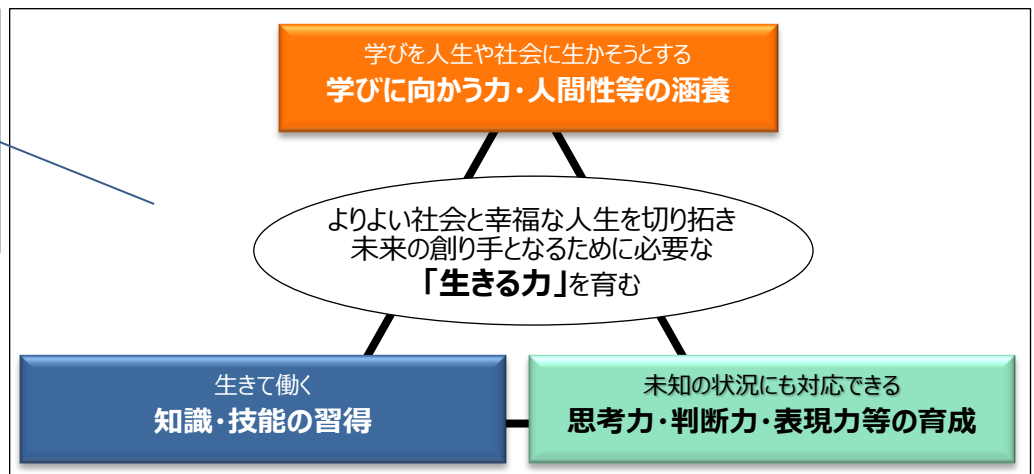
新学習指導要領では、こうした状況を踏まえ、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、**新しい時代に求められる資質・能力**を子どもたちに育む「**社会に開かれた教育課程**」の実現をめざすことが示されました。

本リーフレットでは、「育成をめざす資質・能力」「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」「小学校におけるプログラミング教育」についてまとめています。

2 育成をめざす資質・能力

「何ができるようになるか」の視点から、**全ての教科等の目標及び内容が、「育成をめざす資質・能力の三つの柱」で整理**されました。

単元や題材のまとまりの中で資質・能力の育成をめざします。



育成をめざす資質・能力の三つの柱

資質・能力の育成に向けた各教科等の指導のあり方

- 明確で具体的な単元（題材のまとまり）の目標の達成をめざします。
- 子どもの現状から単元目標への道筋を考え、学びの過程を計画・実施します。
- 見取りの指標（評価の観点）にしたがって、目標への達成度を測ります。

- 教科・領域の単元の学習の積み重ねが資質・能力の三つの柱（めざす子ども像）の育成につながります。

単元の目標（育成をめざす資質・能力） 何ができるようになるか

- 【教育目標】
- ・学校教育目標・学習指導要領
 - ・めざす子ども像 など

学びの過程（目標に向かう道筋） 何を学ぶか、どのように学ぶか

- 【学習内容・場面・方法】
- ・単元目標に即した学習課題との出会い
 - ・基礎的な知識・技能の習得、活用
 - ・知識・技能をつなげる
 - ・知識・技能を使って、思考し、まとめる など

主体的・対話的で深い学び

各教科の「見方・考え方」を働かせる

学びの過程において、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくかということ

子どもの現状（目標に向けた実態）

- 【実態把握】
- ・既習事項等の到達度
 - ・学習に対する意欲や構え など

見取りの指標（目標への到達度）

何が身に付いたか

- 【観点別学習状況】
- ・評価規準、判断基準 など

3 主体的・対話的で深い学び

これからの時代に求められる資質・能力を身に付けるためには、**学習の質を一層高める授業改善の取組み**が求められます。その授業改善の視点となるのが、「**主体的・対話的で深い学び**」です。

疑問

不思議？ 本当はそう？
困ったな？
そういえばこの間…！
こうすればできそうだ！

対話

友だちはどう考えているだろう？
本には何と書いてあるだろう？
以前の自分ならどうしただろう？

納得

そうか！
伝えてみよう！

新たな疑問

他の場面ではどうだろう？
もっとうまくするには？

主体的な学びをめざすために

日常生活や社会事象等、子どもたちにとって身近で解決したくなる学習課題(驚き・不思議さ、必要感、不都合感等の要素を含む課題)の設定が「主体的な学び」への仕掛けの1つです。

対話的な学びをめざすために

知識の整理、記述した内容をよりよいものにする、内容の共有等、「何のための対話なのか」を明確にすることが大切です。子どもどうしの話し合いや書物との対話などで、思考が活性化され、考えが広がり深まることが重要です。

深い学びへ

「できた」「そういうことか」といった学びの実感を持たせ、新たな課題(問い)が湧いてくるような学びの過程を繰り返していくことが大切です。

上記は学習過程の一例です。子どもたちにとって生涯にわたる学びにつなげるために、疑問を抱き、納得にいたる学習活動が大切です。
なお、学習指導要領解説 総則編では「主体的な学びの視点」「対話的な学びの視点」「深い学びの視点」として整理されています。

ポイント 「深い学び」の鍵となる 各教科等の「見方・考え方」

各教科等の学びの深まりの鍵となるのが、「**見方・考え方**」です。「見方・考え方」とは、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方です。

例えば、1本のペットボトル入りのミネラルウォーターに対し、採水地に着目して追究する「社会的な見方・考え方」、ラベルの色やデザインに着目してよさを表現する「造形的な見方・考え方」…といったように、ある対象に対して様々な捉える視点や思考の仕方があります。

新学習指導要領では、その解説の中で各教科等ごとに「見方・考え方」が示されました。**教科等固有の学びの有り様、教科の本質となる学び**が各教科等における「深い学び」を実現することにつながります。

子どもたちが、授業の中で様々な「見方・考え方」を働かせ、深い学びへつなげるために、一人ひとりの教員が、**各教科等を学ぶ意義**を改めて考えてみるのが大切です。



独立行政法人 教職員支援機構WEBページでは、「オンライン研修」として、各教科等の改訂のポイントや「見方・考え方」等について、動画で学ぶことができます。

<http://www.nits.go.jp/materials/>

ポイント 単元等のまとまりを見通す

主体的・対話的で深い学びは、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではありません。「**付けたい力**」を明確にし、**単元など内容や時間のまとまりの中で、授業をデザイン**することが重要です。

主体的に取り組めるよう学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚する場面、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面、また学びを深めるために子どもたちが考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかといったことがポイントです。
このような視点で単元等のデザインをしてみましょう。

ポイント 対話的な学び～目的のある「ペア学習」「グループ学習」が重要！～

単元等の終末で子どもたちにどのような力を身に付けさせるのか、ということ想定し、学習の過程として「ペア学習」や「グループ学習」を設定することが重要です。また、書物等を通じて「先哲の考えを手掛かりにする」ことなども対話的な学びの一つです。

対話的な学びが、「**自己の考えを広げ深める学習活動**」になっているかが重要です。



独立行政法人 次世代型教育推進センターWEBページでは、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善により実現したい子どもの姿」がピクトグラムを用いて分かりやすく紹介されています。

<http://www.nits.go.jp/jisedai/achievement/jirei/index.html>

4 カリキュラム・マネジメント

これから求められる資質・能力を確実に育成していくためには、学校全体で教育課程（カリキュラム）に基づく教育活動の質的向上を図り、**学習の効果の最大化を図る「カリキュラム・マネジメント」**が重要となります。新学習指導要領では、カリキュラム・マネジメントについて、次の三つの側面で整理されました。

カリキュラム・マネジメントの三つの側面と具体的な取組み例

○三つの側面

○学校における具体的な取組み（例）

教科等横断的な視点

総合的な学習の時間において、教科等の枠を越えた横断的・総合的な学習が行われるようにするなど、全教科等を俯瞰的に見て、教科等間のつながりを意識する。

- ・各教科等の単元ごとの目標を明示・共有
- ・付けた力を教科間で活用

教育課程の実施状況を評価・改善

各種調査結果やデータを活用して子どもたちや学校・地域の実態を定期的に把握、その結果から教育課程の実施状況を分析し、課題を見だし改善する。

- ・子どもの実態把握・共有
- ・取組み評価の指標を明確化

必要な人的又は物的な体制を確保

教員の指導力、教材・教具の整備状況、地域の教育資源等について具体的に把握して、教育課程の編成に生かす。

- ・めざす子ども像とそれへのプロセスを学校だけでなく地域とも共有



組織的・計画的に取り組むカリキュラム・マネジメント

- 教育課程の編成作業は、校長を中心として全教職員の協力のもとで行うことが求められます。
- 学級や学年、教科等の枠を越えて連携協力し、創意工夫を生かした教育課程を編成することが大切です。⇒各教科等間の指導内容相互の関連を図るために、学習する時期や順序について改めて考えてみましょう。
- 日々の授業等教育活動では、常に教育課程全体の中での位置づけを意識しながら取り組むことが大切です。



様々な課題（〇〇教育）をカリキュラム・マネジメントで効果的に学習

- 教育課程を見直すことで、特定の学習課題を効果的に学ぶことができます。中学校における「防災を含む安全教育」を例に考えてみましょう。

学習課題	防災を含む安全教育	
学習指導要領	社会科	日本の様々な地域について
	理科	大地の成り立ちと変化について
	保健体育科	健康・安全にかかわる内容
	道徳科	主として自分自身に関すること 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

「防災を含む安全教育」という学習課題について、学習指導要領で関連する項目をピックアップすると上記のようなものがあります。それぞれの内容を関連付けることでいろいろな側面から学ぶことができます。このことにより、学びの内容が広がり、深まることが期待されます。



学習指導要領解説 総則編「付録」において、「現代的な諸課題に関する教科横断的な教育内容についての参考資料」が示されています。



5 小学校におけるプログラミング教育

小学校におけるプログラミング教育導入の背景

今日、情報技術は急激な進展を遂げ、子どもたちが情報を活用したり、発信する機会も増大しています。このような時代背景を踏まえ、子どもたちが将来どのような職業に就くとしても時代を越えて普遍的に求められる「プログラミング的思考」を育んでいくことは極めて重要です。

「プログラミング的思考」

自分が意図する一連の活動を実現するために、どのような動きの組合せが必要であり、一つ一つの動きに対応した記号を、どのように組み合わせたらいいのか、記号の組合せをどのように改善していけば、より意図した活動に近づくのか、といったことを論理的に考えていく力のこと。

小学校におけるプログラミング教育のねらい

- ① 「プログラミング的思考」を育むこと
- ② プログラムの働きやよさ、情報社会がコンピュータ等の情報技術によって支えられていることなどに気付くことができるようにするとともに、コンピュータ等を上手に活用して身近な問題を解決したり、よりよい社会を築いたりしようとする態度を育むこと
- ③ 各教科等での学びをより確実なものとする

「小学校プログラミング教育の手引（第二版）」（平成30年11月文部科学省）より

小学校におけるプログラミング教育導入について

各教科等の学習課題の解決のため、いずれかの学習場面においてコンピュータを用いて論理的に学習を進めることが考えられます。「小学校プログラミング教育の手引（第二版）」ではいくつかの例示がなされています。

- ◇ 正多角形の意味を基に正多角形をかく（算数 第5学年）
- ◇ 身の回りの電気の性質や働きを利用した道具があることについて学習する（理科 第6学年）
- ◇ 「情報化の進展と生活や社会の変化」を探究課題として学習する（総合的な学習の時間）
- ◇ 様々なリズム・パターンを組み合わせさせて音楽をつくる（音楽 第3学年～第6学年）
- ◇ 都道府県の特徴からその名称と位置を学習する（社会 第4学年）
- ◇ 自動炊飯器に組み込まれているプログラムを考える活動を通して炊飯について学習する（家庭 第6学年）

「プログラミング的思考」の育成と「情報活用能力」との関係を確認しておくことも重要です。単にプログラミング教育を充実し「プログラミング的思考」を育めばよいということではなく、情報を収集・整理・比較・発信・伝達する等の力をはじめ、情報モラルや情報手段の基本的な操作技能なども含めたトータルな情報活用能力を育成する中に、「プログラミング的思考」の育成を適切に組み入れていく必要があります。



プログラミング教育の指導に当たって留意すべき点

- プログラミング教育では、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付ける学習活動を計画的に行うことが重要です。
- コンピュータを用いずに「プログラミング的思考」を育成する指導は、これまでの実践にも見いだすことができ、今後も取り入れていくことが考えられますが、プログラミング教育全体のカリキュラムの中で、子どもたちがコンピュータをほとんど用いないということは望ましくありません。
- プログラミングに取り組むことを通じて、子どもたちがおのずとプログラミング言語を覚えたり、プログラミングの技能を習得したりするといったことは考えられますが、それ自体をねらいとしているではありません。



「小学校プログラミング教育の手引（第二版）」（平成30年11月 文部科学省）の中では、「学習指導要領に例示されている単元等で実施するもの」「学習指導要領に例示されていないが、学習指導要領に示される各教科等の内容を指導する中で実施するもの」等に分類して、多くの指導例が紹介されています。

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/11/06/1403162_02_1.pdf

